研究紀要　第9号　77－94頁　2001年3月
㈶とちぎ生涯学習文化財団　埋蔵文化財センター

縄文時代における底部圧痕について
－予察と栃木県下の概要－

篠原（しのはら）　浩恵（ひろえ）

Ⅰ　はじめに　　Ⅲ　栃木県下の様相
Ⅱ　基礎的整理　　Ⅳ　おわりに

栃木県下における底部圧痕については、研究は端緒についたばかりであり、その様相は全くの未知といえる。その様相を僅かなりとも、明らかにすべく稿を起こしたが、その準備として、まずは、先学の力を借りつつ、底部圧痕自体の概要を把握し、観察点の整理を行った。その結果、集落や精神面等を含めた縄文社会の流れに、紛うことなく追従する底部圧痕の推移があることを予察し得た。但し、未だ予察の段階であり、これを検証するためにも、様相を明示していくためにも、考古学的な史学性を根拠とした基本的な観察を積み重ねるとともに、民俗学や民具学等との比較検討が不可欠となることを再確認した。

Ⅰ　はじめに

土器に残存する圧痕は大きく二つに分けられる。一つは組織痕土器であり、一つは底部圧痕である。組織痕土器については、九州地方の晩期に認められる土器製作の型離れ技法に伴い、カゴ等の実物・型離れ用素材が残存したものと、その付着理由が明確となっている。底部圧痕については、土器製作時の敷物との通説があり、当時の生活を復元する「間接資料」（植松1980）としての有益生が高く、そのアプローチは多方面に渡るものの、その詳細については不明確な要素が多い。本稿は、後者である底部圧痕を対象とするものである。

底部圧痕については、E.S.モース、考古学の父・浜田青陵[1]以来、観察の記録があるものの、研究の初現となるのは坪井正五郎の一連の論考となろう（坪井1899等）。しかし、坪井に限らず、当時の関心は、網代痕などの工芸的技術から、縄文時代の技術や生活様式の高さを類推する資料として扱われ、その研究の主流は編み方にあった。以後、八木奨三郎（八木1905）、杉山壽栄男（杉山1928等）、小林行雄（小林1965）と、多くの先人により纏められているものの、常に編み方主体の研究であったといえる。

転機となったのは、考古学的物証を基に歴史的背景を探られた江坂輝彌（江坂1955）の論考といえる。これ以降、山内清男の推奨により圧痕研究に着手された荒木ヨシ（荒木1968等）、

渡辺 誠（渡辺1976等）、名久井文明（名久井1998等）、安孫子昭二（安孫子1971）、長沢宏昌（長沢1986等）などにより、多くの論考がなされている。しかし、圧痕とは何か（人為か偶然か）、その付着理由（いつどのように付着したのか）、付着物（再利用か専用か）など不明確な要素があり、内在する問題は多い。

これまでの研究の流れをみると、荒木に代表される底部圧痕自体から社会構造の一端を引き出そうとする方法、渡辺誠を筆頭とする生活用具の復元から生活様式に迫ろうとする方法、名久井が実践する民具学からの技術論を根底とする方法とに大別できよう。しかし、これらは相互に密着して関連するものであり、内在する基本的な問題点を含め、土器底部を資料とする限り、基礎的且つ詳細な、また、編年観をもった考古学的判断が重要となる。但し、現在の状況においては、集落全体を調査できることが少ないことや、報告書作成の際に資料がオミットされる場合があるなど、資料的な限界も多い。しかし、先学に学び、僅かなりとも、物証史学の何たるかを体得すべく、基礎的観察に着手したい。

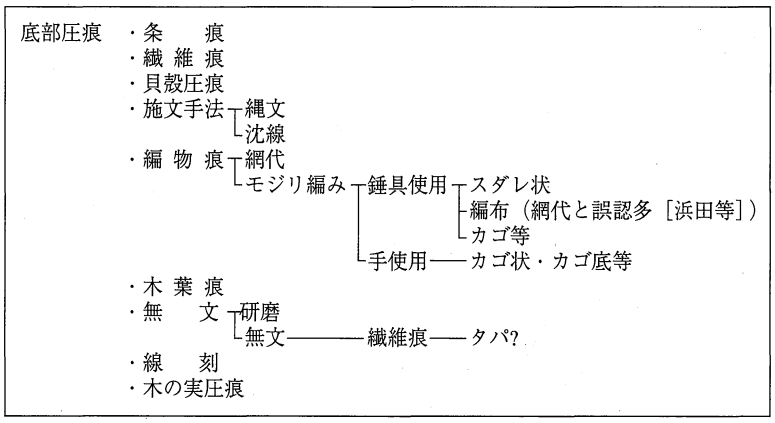
稿を記するにあたっては、個人的能力の限界もあり、主に東日本が対象となることや、紙面上の制約もあり、概要を連ねるに止まることを明示させていただきたい。

Ⅱ　基礎的整理

1　底部圧痕の種類

一概に底部圧痕と称しても、底面に残された痕跡は数種に亘る。本来、偶然の産物であるのか＝圧痕、意識的なものであるのか＝施文、この根本的な差異によって底部圧痕を整理すべきであろうが、底部全てをその範疇にとらえずしては、研究の視点とならないのが現状である。また、カゴ類や編布などについては、各々、生活様式復元の重要な一画を占め、単独で扱われることが多いが、底部圧痕として、その種類を簡単に整理するならば、第１図のようになろう。

網代編みについて渡辺誠は「カゴは網代編みに限られないこと、笊は網代編みの一種に過ぎず、すべてには当てはまらないことなどから適切とはいえず、目に見える表現としたい。」（渡辺1982）と



第１図　底部圧痕分類模式図

されている。前述のように、底部圧痕には基本的な問題が内在するものの、資料の煩雑さを避ける意味からも、この指摘どおり形態を判別できるもの或いは形態を推定できるものについては、各々の名称で呼ぶことがふさわしいものと思われる。カゴや錘具使用のモジリ編みについては、渡辺誠をはじめとする先学の詳細な研究により生活復元が進められ、底部圧痕を観察する上での重要なポイントが提示されているからであり、以下においてもこれに即して進めることとしたい。

2　時期的推移

A　概　要

底部圧痕の時期的推移については、荒木ヨシ、長沢宏昌の論文に詳しいが、本稿においては、管見し得た資料も含め、縄文時代の時間的な流れに沿った概要の把握に努めたい。

縄文時代草創期においては、荒木の観察によれば、既に、平底土器にその付着が認められると云い[2]、この時期に既に編物が確立していたことが読み取れる。近年では、針状の石器の出土から旧石器時代における繊維製品の存在も指摘され、編組技術の年代観は遡上しつつあり、圧痕研究の今後の趨勢と相まって注目される。

カゴ底状圧痕については、この時期以後、中期初頭・晩期にその観察例が報告されている（渡辺1983・長沢1987a)。縄文時代の最もポピュラーな底部圧痕といえる網代痕は晩期に至るまで認められる。

早期の尖底土器についても繊維等の痕跡が観察されている（荒木1995)。しかし、整形時の痕跡であるのか、文様であるのか、一概には判断し得ず、資料の増加を待つ状況にある。北海道に見られるホタテ貝圧痕は、貝上での成形によるもので、文字通りの圧痕とされるが（荒木1968)、意図的なものであるか否かは定かにし得ない。

前期の圧痕は、縄文や連続刺突文（第５図９）など器面へ施される文様が底部へ採用される例が少なからず認められる。文様と器形との関係に一定の法則があることが指摘されていることや[3]、二重に付着した網代圧痕から[4]、「圧痕」とするより「施文」的な要素が強いものの存在が示されている。

また、前期の圧痕については資料の増加からか、時期差・地域差などの明瞭化が挙げられている。しかし、前期に特徴的な縄文圧痕は、東北地方から中部地方にかけての分布とされているが、大阪府国府遺跡出土の北白川下層式の底部にも確認でき[5]、その分布域は更に拡大するものと予想される。また、先述の連続刺突文は、云うまでもなく、東北地方を中心に分布する施文方法であり、土器型式との関連も考慮すべきであろう。また、スダレ状圧痕は、中期以降北陸地方を中心に認められる圧痕であるが、前期前葉に熊本県下での確認がある。

中期以降の圧痕の主体は網代痕といえる。底部への磨り消しによって、圧痕自体が不明瞭に

なるものが多く認められる。磨り消しの部位については、底部全面に施されるものや周囲のみ、中央部のみに大別されるが、規則性は感じられない。

後期には、中央填め込み技法（第４図６　秋田1990）による底部成形により、底部周縁部のみに圧痕が見られるものや中央部のみ、或いは、周縁部と中央部で異なる圧痕が観察できるものがある。底部への磨り消しも引き続き観察されるが、中央填め込みによる成形と混同視されることが多く、その実数は少ないものと判断される。

晩期には、網代痕が減少するとの指摘があるが（荒木1968）、資料が増加し、晩期を通じての現象ではないことが判明しつつある。しかし、底部径の小型化や台付製作における網代敷きの不安定さ、底部への精製粘土液塗布（荒木1968）などの問題は手着かずの状態にある。また、土器編年上の減少期であることも現段階では否めない。

時期の推移を追う過程で、地域性も看過できない存在として浮かび上がってくる。

前期の縄文圧痕は、前述のとおりであるが、中期に初現を見る鯨の脊椎圧痕も九州地方に特有のものとされる。スダレ状圧痕は主に中期以降[6]、日本海側を中心に認められるが、北陸地方に顕著である。編布圧痕も中期～後期には北陸地方に、晩期には九州地方に密集する。近年の資料の増加によってその分布域は広くなってはいるものの、全く確認されない地域もある。長沢も山梨県下に編布本体の存在は否定できないとされながらも、編布圧痕が確認されない事実を挙げられている。土器の文様研究とは比べもようもない程に底部圧痕の資料化が図られていないことは歴然たる事実であり、これによって地域差と誤認していないとも言い難い。しかし、北陸地方に偏在する分布や時期的問題は、単に、底部圧痕研究の先進地というだけでは説明し得まい。

Ｂ　圧痕の変化

縄文時代の圧痕の概要を時期区分ごとに示したが、時間軸に沿って圧痕の変遷を追えば、草創期・早期の不明瞭な様相から前期に特徴的な縄文圧痕、中期以降顕著となる網代圧痕への流れが大きく捉えられる。ここでこれらの圧痕自体の変化を確認したい。

①縄文圧痕

早期末葉にはその初現が見られ、花積下層式などの上げ底土器の底部には確実に観察できる。多用化するのは関山式期以降といえ、概ね前期という範疇に納まる。長沢は縄文の付着の仕方から、諸磯ｂ式器を境とする新旧２時期を想定された。即ち、

旧期…「土器製作段階で底面下に何かを敷いたことは確実で、その痕跡を消した上で、もしくは消さないまでも、前の圧痕が完全に無くなるよう」強い意識のもと丁寧な作りが行われた段階。

新期…「底面に空白部が多く、木葉痕をそのまま残すなど手抜きが多い」段階で、「前段階

に名残としてこの手法が用いられる。」

であり、この背景として、広場を有する馬蹄形集落・土器の多様化などから諸磯式期を境に中期的な生活が始まるとの考えを挙げられ、山梨県下の縄文圧痕には、諸磯式後半に意識的な圧痕から製作時に付いた結果という変換点があるとの指摘をされている（長沢1987a）。

②カゴ底状圧痕[7]

先述のとおり、草創期以降、中期初頭（第４図２・３）・後期後葉以降（第４図４）に観察例がある。草創期のものについては、未だ実見し得ていないが、中期初頭のものと資料化された後期以降のものを比較するならば、中期初頭のそれは非常に曖昧な痕跡であるとの印象を受けた。特に第４図２については、縄を回転させた様な直線的な痕跡とも見えた。後述する「カゴ」の判断（渡辺1985）を満たすものが、石川県御経塚遺跡など後期中葉以降の底部圧痕に集中する傾向にあるように見られることなどから、前期の縄文圧痕の末期的な痕跡と考えることは不可能であろうか[8]。

③網代圧痕

主体となるのは中期以降といえようが、網代圧痕は縄文時代を通じて最もポピュラーな圧痕であろう。前述のように中期においては底部への磨り消しによってその観察は不明瞭となるが、中期前半・後半・後期を境に編み目は精緻に且つ優美になっていくとの指摘がある（荒木1968・1971）。管見し得た資料や報告書等から抽出できる資料からは、中期後半前段階までの時期と後期前葉以降の時期とに大きな変化が見いだせる。中期後半前段階－加曽利EⅡ式期相当－までは、篠竹類の割材を使用したようなざっくりとした編み目の粗い、比較的簡易に見える編み方の圧痕（第４図５）が主体であるが、後期前葉－堀之内式期－以降になると、素材も篠竹類の割材と見えるものや繊維状のもの、質感もアンペラ[9]様のものから硬質なもの、編み方も緻密なものや模様編みのものと、ヴァリエーションに富む傾向にある。狭間に位置する中期後葉～後期初頭については、資料の絶対数が少ないことなどから判然としないが、少なくとも中期末葉の時期に関しては、後期的な様相が色濃いものと考える。

圧痕に見られる編み方の変化について、前出の荒木は「工芸製品の一部を占める網代の製作も高度の発達」（荒木1970）と捉えられているが、既に、前期の福井県鳥浜遺跡や神奈川県羽根尾遺跡から緻密な編粗品や模様編みの網代製品が出土しており、編組技術の緩慢な発達に起因する現象ではないことは明白である。また、土器製作上の問題に関与したものとの考えもあろう。確かに、大きさや胎土に含まれる水分量等の差異は考慮すべき点ではあるが、栃木県寺野東遺跡出土の堀之内式の大型の深鉢土器の底部には繊維状の素材で編まれた鋸歯文的な網代が採用されており[10]、大きさ上は採用される編み物に条件的な要素は少ないものと考えられる。考慮すべき問題が非常に多く残されてはいるが、現状において、網代圧痕に時期的な変遷が窺

われることを捉えておきたい。

④線刻・木の実圧痕

先学の力を借りれば（大関2000）、意匠文、クルミ・ドングリ等の木の実圧痕に大別できるという。意匠文については女性器を表現したものが多く、クルミ圧痕[11]とともに、祭祀や特別な願いが込められているとの解釈がある。反対に、ドングリやガマズミ[12]などの圧痕は、収穫を祝うといった生活に直接的な圧痕であるとされる。

時期的な動向は、ドングリ等の圧痕は中期が、意匠文・クルミ圧痕は後～晩期が中心となり、先の解釈と考え合わせれば、「第二の道具」的な変質といえる。本稿で扱う所謂底部圧痕とは意味合いを異にするものであろうが、土器底部の器面性と底部に表れた精神性とが中－後期に変質する様が読み取れる。

C　時期的推移

前段において縄文時代に特徴的な圧痕の変化について整理を試みたが、取りも直さず、これらは時期的な推移と捉えられよう。様相の定まらない草創期・早期については検討課題となろうが、縄文時代という枠組の中で、次の様な圧痕の変遷が想定し得るものと考える。施文としての意識が高いと判断される前期中葉までの時期→施文としての意識が形骸化すると判断される前期後葉→様相の不確かな中期初頭を挟み、比較的粗く硬質な圧痕が定形的に見られ、底部に磨り消しが施される中期中葉までの時期→中期後葉～後期初頭を挟みヴァリエーションに富んでくる後期前葉以降→圧痕自体の減少が窺われる晩期以降であり、これらを圧痕の画期と捉えられようか。

3　縄文文化の推移

根幹となる縄文社会については、多方面からの細密なアプローチにより、その鮮明さが増していることは衆知の事実である。縄文社会を大局的に把握するため、それらの研究成果に学び、その推移について概要を抽出したい。

生活の基盤となる「住」環境については、早期末葉～前期にかけて定住計画の普及があったとの指摘がなされている（山田1996）。縄文圧痕変化の背景として長沢が指摘した馬蹄形集落については、環状集落の顕著な発達段階として、早期末～前期初頭（関東・中部地方における）＝成立期→前期中葉（黒浜～諸磯ａ式期）＝発達期→中期初頭＝中断期（消滅）→中期前半（勝坂１式直前～加曽利E３式期）＝最盛期→中期末葉＝解体期→後期前葉～中葉（堀之内１期式～加曽利b１式期）＝復活期　の時期が提示されている（谷口1998他）。

生活を支える「生業」については、技術運用により三時期に区分できることが指摘されている（山田1999）。１期（7000年前以前）同居者による生業単位・２期（7000～6000年前頃から）「村」の普遍化・３期（4000～2500年前）「村」のまとまりを超えた地域社会であり、３期の

例として示された水場遺構に関して、後期の土器器種構成と労働編成から後期初頭～中葉（堀之内式期）の時期における空間利用システムの変質が明示されている[03]（阿部1998）。

文化の変質を投影する精神面について、第二の道具である土偶・石棒を例に取り上げたい[04]。

土偶については、その資料化が進み、中期における偏在が明らかとなっている。中期は草創期以来の「人形」としての土偶の到達点であり、土偶の盛行期であるが、中期末葉～後期初頭の空白期を挟み、後期前葉以降の土偶は「世界観の表現物」であるという、根本的な造形概念の相違があるとされる。東北地方を中心とする第二の盛行期である晩期に至っては、墓壙からの出土により、土偶そのものに対する役割期待の変質が指摘されている（原田1999・今福1999）。

石棒は、前期後半－出現期・中期－大型化、住居内における家族単位の儀礼的様相・後期－屋外における集団祭祀的様相・晩期－第二の道具自体の多様化、共同の祭祀場的様相との変遷が辿れるとされる（今福1999）。

以上を見ると、間に空白期を挟みつつ前期後半・中期前半・後期前葉に変質期が見出せる。多少のタイムラグは存在するが、抽出した事象は何れも単一のものではなく、環境的要因、これらに付随する変化要因[05]に左右され、相互に密接な関連を持つことは云うまでもない。時間的な動きに幾ばくかの誤差が生ずることは、事象の連動を捉える上での差異になるとは考えられまい。

今回提示した事象は、縄文文化においては、本の僅かな例に過ぎず、無論、これが全てでも結論でもなく、更なる多角的な視野が必要となろう。しかし、多くの要因によって推移する社会・文化の流れにおいて、圧痕の時間的な推移が、これらの事象の時間的推移とリンクすることは読み取れる。ここに圧痕自体が社会的変遷に連動した事象であることを察知できよう。

4　圧痕の推移

圧痕の時間的な推移については先に示したが、ここで圧痕の推移について、具体的時期が明示されている集落の推移と対比しながら振り返る。

1	早期末葉～前期初頭		→	環状集落成立期
2	前期中葉までの時期（諸磯ｂ式期まで）	－施文的意識	→	環状集落発達期
3	前期後葉（諸磯式期後半）	－手法の簡略化	→	環状集落の消滅
4	～中期初頭までの時期	－様相不明瞭な時期		
5	中期後半前段階までの時期（加曽利EⅡ式期）	－定形的な網代圧痕	→	環状集落最盛期
6	中期末葉～後期初頭（加曽利EⅢ～称名寺式期）	－様相不明瞭な時期	→	環状集落の解体

7　後期前葉（堀之内～加曽利Ｂ式期）

－ヴァリエーション豊富な網代圧痕　→　環状集落復活

8　～晩期　－圧痕の減少期　→　集落から地域へ

縄文文化の推移と絡めて考えれば、指標となるのは、所謂「共同体」の推移と捉えられようか。私的には前期～中期に特出する大型住居[06]も一つのポイントになるものと考えているが、ここに、社会的な趨勢に連動する圧痕の変質を推察し得る。直接的な生活環境の変化によるものか、そこから派生する集団生活を営む上でのある種の禁忌（荒木1995、谷口1998）－文化的環境の変化によるものか、そこにある何事に呼応するものであるかは明確にはし難い。おそらくは、それらを包括した諸要因が錯綜する中で、地域性かつ遺跡の独自性が顕現化した結果なのではあろうが、その流れは、２の施文→３の施文の簡略化→５の定形的な網代の採用（ある種の規則性）→規則性の払拭　と映り、縄文社会の「共同体」としての拡大に連動した、施文或いは底部の器面としての「意識」が形骸化する、圧痕の推移であることを予察し得る。とすれば、５の段階に多用される底部への磨り消しも、土器製作上の一工程とも考え得たが、２の段階の圧痕を消し去った後縄文を施文するという、底部の器面性の名残であるのかも知れない。何れにせよ、以上についてはあくまでも予察であり、これを検証する上でも、底部圧痕の様相を明確化する上でも、詳細な観察・検討を進めていかなければならない。

Ⅲ　栃木県下の様相

1　観察点の整理

本来の主旨に立ち返り、基礎的な観察を進めていきたい。

未だ検討の甘さや不備があることは否めないが、観察にあたっては、先学の研究に学ぶとともに、本稿における予察を踏まえ観察項目を設定した。以下、観察点について簡単に整理し、観察にあたることとしたい。

Ａ　編み方

圧痕の種類については先述したが、観察の主体は数量的に多数を占める網代圧痕となる。網代圧痕の観察については、その表記法からして先学が留意なされてきたところであるが[07]、本稿では、これらの指摘を念頭にしつつ、坪井正五郎以来の表記法である経条に対する緯条の出現本数と、緯条と次条とがズレる本数とを示す「超え・潜り・送り」で表記したい。これによって表記される編み方については、坪井正五郎以来、その分布域について論じられており、ここで再考するまでもないが、その足跡を辿りつつ、今日の状況を追ってみる。但し、前述のとおり、圧痕研究には資料的な限界があり、どこまでその全貌に迫れるのかとの懐疑が残ることを再記したい。

坪井の２本超え・２本潜りの分布が最も広いとされた指摘を受けて、小林行雄は２本超え・２本潜り・１本送りが縄文時代の基本的編み方であり、坪井の「２本超え・２本潜りの分布」については、網代の基本的な編み方と捉えたものと解釈された（小林1965）。小林のこの見解に対し、荒木ヨシは分布域と出土総量とは対比にならないものとされ、編み方と時期分布とを関連付け、関東地方や東北地方南部においては２本超え・２本潜り・１本送りが主体となる（荒木1968）との、先の坪井・小林とは異なる見解を示された。これらを受けて安孫子昭二は、土器の文様を鑑み、時期・地域を問わず坪井・小林の指摘した２本超え・２本潜り・１本送りは西日本的網代編みの基本、２本超え・１本潜り・１本送りは東日本的網代編みの基本（傍点筆者）とし、その境を荒木の報告した静岡県浜松市蜆塚遺跡付近に求められた（安孫子1971）。しかし、近年では、これらの分布域について、単なる地理的な分布域と捉えられがちであり、地域性に踏み込んだ解釈がなされないまま観察が行われているように思われる。渡辺 誠が一貫して主張され、また、植松なおみの素材と編み方、気候的要因の相関関係（植松1981）についての示唆を想起し、地域性を捉えていくべきと考える。

また、編み方の「送り」の左右については、明確な記載や数量の提示のない場合が多いが、民具研究に則るならば、右下がりの「送り」が基本となるとのことであり、２本超え・１本潜り・１本送りが左送りの場合、１本超え・２本潜り・１本送りの裏面となろう。「２本超え・２本潜り・１本送り」などのように表裏に変化のない編み方と同一視できるものとは考え難い。

また、観察の方法として実物観察であるのか、型おこしによる観察であるのかによっても「送り」の表示に差異が生じるものと思われる。左右の「送り」を問題の可否は論外におくにしても、基本的な観察の統一化が図られることを望む。

B　機能

環境的要因、特に自然環境（気候・植生等）から波及する問題として－圧痕に採用された網代が再利用品＝不要品であるとの前提が必要とはなろうが－その大元となる編組製品の機能が挙げられよう。木の実等の採集と魚や獣等の狩猟、日常生活用品などとでは、使用目的及び方法は自ずから異なり、機能的な差異が形状や素材、質感等に反映されるはずである。仮に、荒木の指摘どおり、底部に採用される圧痕が、「極めて厳しい制約、制度」の元での技術の強制訓練（荒木1995）の顕現化であったとしても、生活や生業に直結したものであったと考えるのは容易であろう。また、このことにより、集落や生業といった環境条件との相関関係が醸し出されることはあるまいか。編組製品の機能に関しては、形状変化や素材特性、使用材など、民具研究の成果から明らかな点が多く、渡辺 誠や植松なおみ（植松1981）の指摘どおり、民俗資料から学び取るべきことは多い。

形状の判別可能な圧痕として、カゴ底状圧痕があげられるが、物証史学に基づいた「網代＝

カゴではないのであるから、明らかにカゴであることを示す底部や縁どめの組織が確認される必要がある。」（渡辺1985）との判断を満たさねばならない。

また、特徴的な圧痕として、もじり編みが挙げられる。錘具使用のもじり編みであるスダレ状圧痕・編布圧痕はその顕著な例である。編布については、考古学的アプローチ以外からの考察も多く、「＝衣類」と誤認されがちである。無論、越後編布などにより、衣類としての有用性が認められることは動かしがたい事実であるが、出土例のある漆濾しの布の他、運搬具・エゴマ搾りの道具（長沢1989）等用途は多い[08]。衣類については、江坂輝彌が従前よりタパクロス[09]を提唱されている。或いは、無文と観察されている底部にタパクロスの痕跡が確認される日が来るやもしれない。

C　編年観

底部が土器の一部である以上、編年観をもった観察が不可欠であることや、底部圧痕に時期的推移が予察されることから、時期の判断も重要になろう。しかし、調査においては、底部のみ破片で出土する場合が遙かに多い。安孫子は、器形の相似は原則的に底辺部の相似であるとの判断の基に、底辺の立ち上がり角度と形状を完形資料或いはそれに類する資料と比較することによって加曽利Ｂ式の底部の細分化をなした（安孫子1971）。川端敦子（川端1983）・上野修一（上野1986）もこの手法を用いられ、時期を抽出されており、底部圧痕観察の方法となることが実証されている。また、後期における前出の中央填め込み技法（秋田1990）の提示も有益な一助となろう。中期に関しても、底部から体部への立ち上がり方などを拠り所とできようか。決定的な時期判定は難しいものと思われるが、大局的な時期の推定は可能であると判断できる。

D　観察項目

前段に基づき、本稿において設定した観察項目は第１表のとおりであるが、観察にあたっては、以下を視点とし、観察表中の記号もそれらに準じている。

編み方　構成　荒木（1970）を基本とし「超－潜－送」で表す

単位　一条の単位本数　（例　一本取り・二本取り）

間隔　条間の広さを計測

形状　①　底部全面に編みを観察

②　部分的に編みを観察　－　中・・中央部のみ　　周・・周縁部のみ

③　中央填め込み技法と判断されるもの　－　中・・中央部　周・・周縁部

素　材　素材　塙（1982）を基本

a　竹またはそれに近い性質を有する原体

b　草本類の茎と思われる原体

c　蔓または繊維状の原体

第1表　観　察　表

番号	図版	編み方 構造	編み方 単位	間隔	形状	素材(上：経下：緯) 素材	素材 平面	素材 断面	素材 巾	土器 底径cm	土器 器厚mm	土器 角度	土器 時期	磨消し	その他	遺跡 (遺構)
1	8	緯に経が	一本	2mm程で絡	①	aか	筋目?	Ⅰ弱	1.5～2mm	10.3	15	1①	阿玉台Ⅳ	-	重複か製品か	槻沢遺跡
	編1	絡むか	一本	6mm		a	?	Ⅰ	2mm			110°				SK-74
		1-2-1左	一本	2mm		a	?	Ⅰ	1.5～2mm					-		
	編2		一本	密		a	筋目?	Ⅰ	2mm							
2	10	3-2-2	一本	1.5·3	①	a	?	Ⅰ	2mm前後	14.8	17	2①	阿玉台Ⅲ	周囲	径間隔1.5mmと3mm	槻沢遺跡
		3本単位	一本	密		a	?	Ⅰ	2mm		凸状	90°	(大木8a古)		の繰返より2本単位	SK-186
3		1-3-1	一本	5mm	①	a	筋目?	Ⅰ	4mm	15.0	10	1①	槻沢Ⅱ期古	中央部		槻沢遺跡
		2回 1-1-1										100°	阿Ⅲ伴出大木系			
		繰返	一本	密		a	筋目	Ⅰ	2mm前後							SK-393
4		不明瞭	一本	[7mm]	①	a	?	Ⅰ	2.5mm前後	7.2	12	1③	槻沢Ⅰ期	中央部		槻沢遺跡
		1-1-1か	一本	密		a	筋目	Ⅰ	2mm前後			82°	阿Ⅲ伴出の新			SK-390
5	11	1-2-1左	一本	5.5mm	①	aか	-	Ⅰ弱	3.5mm前後	15.0	24	1③	御城田Ⅳ期	周囲		御城田遺跡
			一本	密		aか	-	Ⅰ弱	3.5mm前後			110°	阿Ⅳと大8a中			SK-662
6	13	1-2-1右	一本	7mm前後	①	a?	?	Ⅰ	3mm前後	11.4	15	1①	仲町Ⅴ期	中央部		三輪仲町遺跡
			一本	密		a	筋目?	Ⅰ	2.5mm前後			110°	加EI新			SK-50
7	14	1-2-1右	一本		①	a	筋目	Ⅰ	3mm	12.0	10	1①	加EI	所々		浄法寺遺跡
			一本	密		a	筋目	Ⅰ	2.5mm前後			90°	SK-12			
8		1-2-1左	一本	3mm前後	①		?	Ⅰ	2mm	[15.9]	10	2①	加E前半か	中央部	緯ふっくらか	浄法寺遺跡
			一本	密		bか	-	Ⅰ弱	1.5～2mm			90°				SK-12
9	15	1-2-1左	一本	2.5mm前後	①	a	筋目	Ⅰ	1.5～2mm	7.9	11	2①	加B1～2	周囲か	槻沢遺跡	
			一本	密		bか	-	Ⅰ弱	1～2mm			100°				SI-01
10		1-2-1左	一本	3mm前後	①	a	筋目か	Ⅰ	1.5～2mm	7.5	9	3①	加B1	-		槻沢遺跡
			一本	密		a	筋目	Ⅰ	2mm			80°				C-3ｸﾞﾘｯﾄﾞ
11	16	1-2-1左	一本	1mm	-	a	?	Ⅰ	1mm	-	凸状	-	後期か	-	土製円盤	寺野東遺跡
			一本	密		aか	?	Ⅰ	0.5mm							ｸﾞﾘｯﾄﾞ

平面　例）荒木（1971）

竹類　表皮・・・光沢に富む

内側の心・繊維の張りが強く筋が見られる

断面　山本（1989）を基本

Ⅰ　圧痕の縁が角張ってしっかりするもの

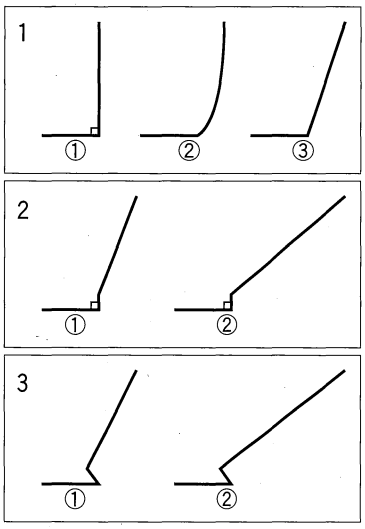
Ⅱ　圧痕が隅丸方形を呈するもの

Ⅲ　圧痕が楕円形を呈するもの

Ⅳ　圧痕部分が丸みを帯び円形を呈するもの

土　器　底径　[　] 推定値　(　) 現存値

角度　第2図参照

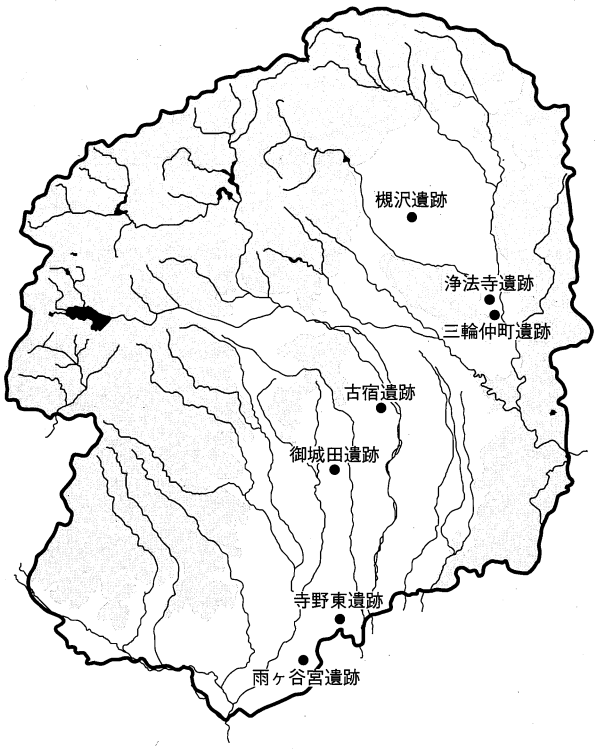


第2図　土器観察分類図

2　栃木県下の様相

A　観察の現状

栃木県下において、調査区内全出土遺物を対象とした圧痕の観察が行われているのは、古宿遺跡の報告書中の観察及び雨ヶ谷宮遺跡の報告と云えよう。何れも道路巾のみの限られた範囲での調査であり、辛うじて方向性が示唆されるに留まっている。古宿遺跡からは底部破片総数612点のうち34点に底部圧痕を確認、木葉痕1点、不明品6点の他に、1-1-1＝1点（中期中葉から後葉）、2-1-1＝13点（阿玉台式3点・中期中葉～後葉3点・後期7点）、1-



第３図　遺跡位置図

3-2・1-3-2・1-3-3の繰り返しで、経条本単位＝１点（中期中葉～後葉）、4-4-2＝１点（中期中葉～後葉）が確認されている（上野1986）。雨ヶ谷宮遺跡からは、遺物収納箱120を越える遺物量中、底部圧痕を有するものは１点のみであった。底部中央は磨り消され不鮮明ではあるが、1-1-1と見える。加曽利E式期前半と判断される。

本来であるならば、観察資料を増やし、各遺跡の詳細な観察の基に特徴を明示していかねばならないが、県下の現状を鑑み、且つ、本稿における紙面の制約から、まずは、既刊報告書に見える概要の把握に止め、詳細は次に譲りたい。

B　県下の概要

予察においては、底部圧痕の時期的推移が必ずしも土器編年上の時期区分にリンクしないことを指摘したが、観察はこれらを検討するためのものでもあり、時期区分に従い県下の様相を追っていきたい。

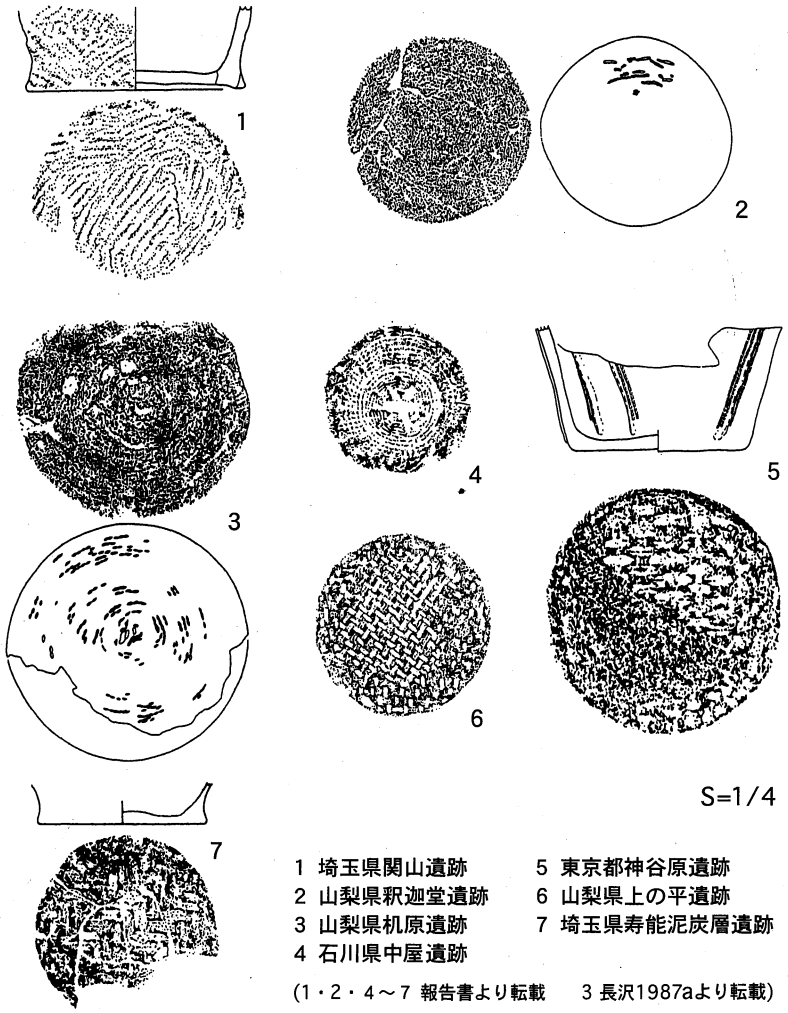
草創期における底部圧痕の確認例の報告は未だない。

早期には、寺野東遺跡の出土遺物中に、条痕及び繊維痕と見られる痕跡を確認している[20]。

前期には、槻沢遺跡出土の連続刺突文（第５図９）が図示されている程度であるが、篠山貝塚出土の前期土器底部には縄文が確認できるとのことである。また、痕跡が薄く、甚だ不明瞭ではあるが、寺野東遺跡出土の黒浜式の底部には僅かに回転した縄文様の痕跡が認められる[21]。

中期には遺跡数の増加に伴い資料も若干増加する。押し引き（第６図12）や木葉痕の報告もあるが、主体となるのは網代圧痕である。

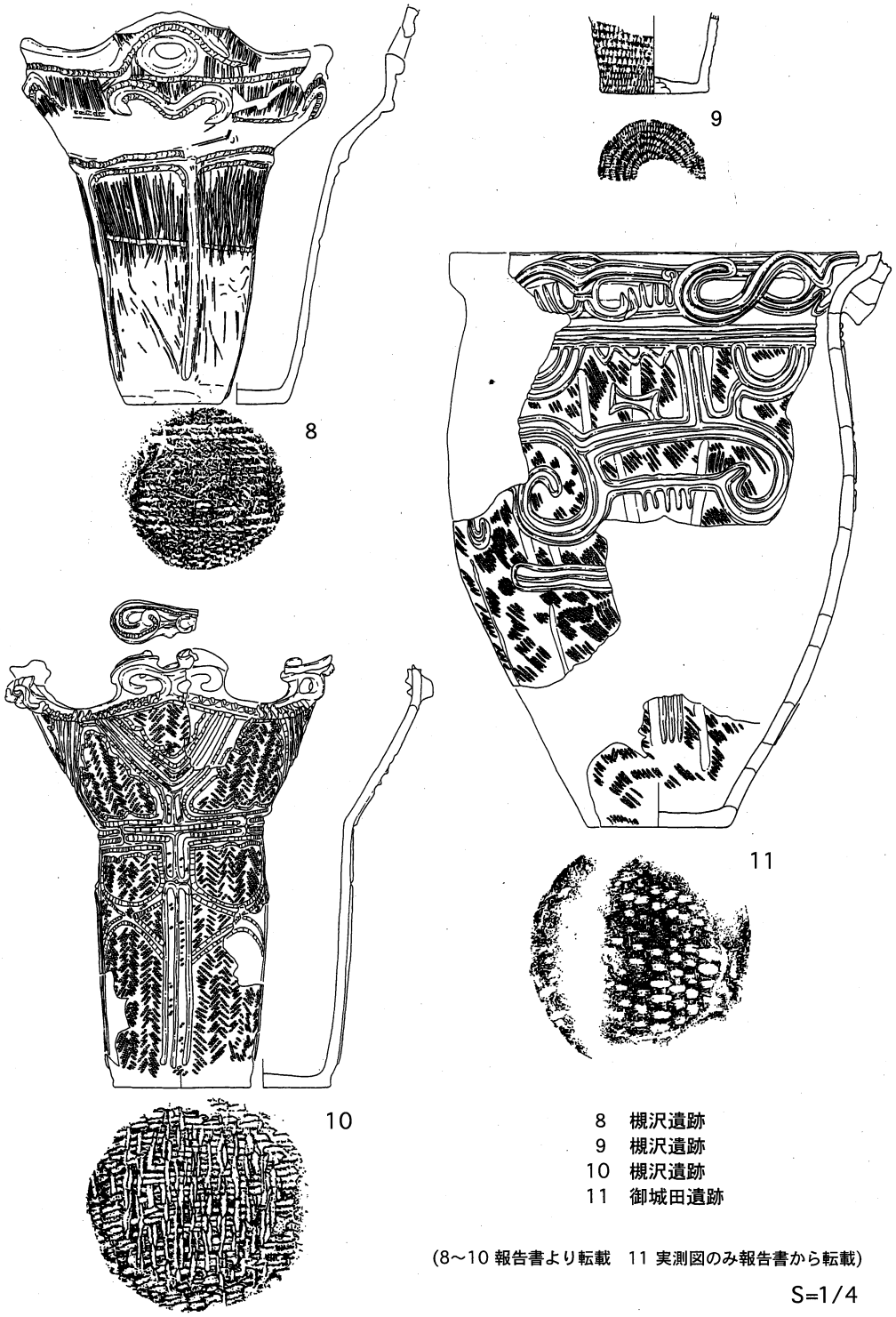
網代圧痕を持つ底部は、遺跡に関係なく磨り消される例が多い。磨り消し部分も全面・中央部・周縁部と一様ではなく、遺跡ごとの特徴は認められない。しかし、編み方については、粗く硬質な定形的な網代であるという共通点はあるものの、遺跡による特色が現出するようで、



第４図　底部圧痕の概要

御城田遺跡（第５図11）や三輪仲町遺跡（第６図13）など比較的簡易な編み方が主体となる遺跡が多い中で、これらとほぼ同時期の槻沢遺跡においては、一条の単位本数が二本或いは二本に見せようとする意図が窺われるものが多く認められる。

後期の圧痕の報告例は今のところ少ないが、網代圧痕が主体となろう。中期と同様の粗く硬質な網代の他に、編みの細かいもの（第６図16）や模様構成をとるものなどが確実に存在する。また、寺野東遺跡からは、Ⅱ２の「Ｂ　圧痕の変化」③の項において先述した、堀之内式の比較的大型な土器の底部に見られる鋸歯的模様を持つアンペラ状の圧痕を代表として、堀之内式～加曽利ｂ式期を中心とした底部片に鋸歯的模様が多く見られる他、アンペラ状、硬質な網代等を確認している[23]。

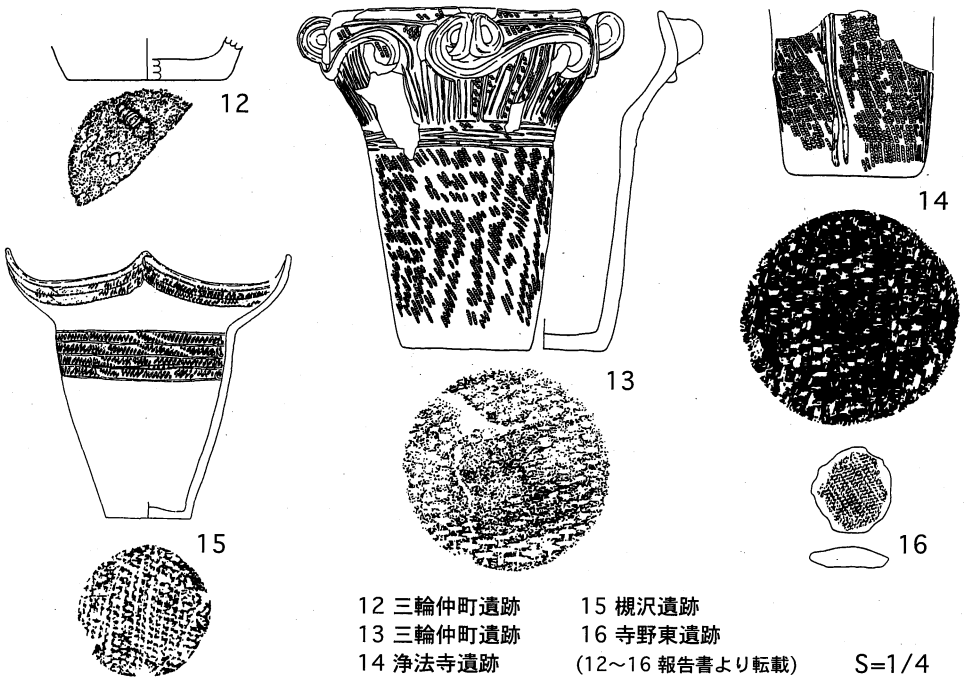


8　槻沢遺跡
9　槻沢遺跡
10　槻沢遺跡
11　御城田遺跡

(8～10 報告書より転載　11 実測図のみ報告書から転載)

S=1/4

第５図　栃木県の底部圧痕の概要(1)



第６図　栃木県の底部圧痕の概要(2)

この他、形状が判別可能な圧痕として、藤岡神社遺跡・八剣遺跡から一例づつが確認されている編布圧痕が挙げられる。藤岡神社遺跡出土のものは、経・緯とも太さ約1.0㎜の甘いｒ撚りの繊維が、経1.0～1.1㎝・緯1.5㎜前後の間隔で編まれており[23]、渡辺誠の分類に従えば、粗い編み方に属する。詳細な時期の判別は難しいが、後期後葉以降の所産と考えられる。

以上、大まかである観は拭えないが、栃木県下の様相を追った。如何せん、資料の数量的な問題は否めないが、現状では、前期に縄文圧痕が見られること、中期の主体が粗く硬質な定形的な網代であること、後期には網代痕のヴァリエーションが増えること、と、予察し得た傾向と近似した様相といえる。また、中期初頭、中期後葉～後期初頭及び晩期の類例が見られないことが、環境的要因に連動したものであるかは、以後の観察結果を待たねばなるまい。

C　特徴的な遺物

槻沢遺跡出土の第４図８は、粗く硬質な網代圧痕であるが、中期に多く見られる単一な編み方ではなく、定型的な1-2-1左⇔経条の緯条絡み（２回絡み左１つ送りか）の移行が明確に観察できる[24]。如何に使用材が硬質であっても、６㎜程の空間を持った緯条に、２㎜程の巾の経条列が絡む構成でありながら、条の乱れもなく聢りとした様を呈しており、網代製品としての完成形或いは完成形に近いものとの印象を受ける。再利用品と判断できる圧痕であろうか。

第６図16については、長沢宏昌が、後・晩期を中心に認められる極めて細密な編み目の圧痕に類する（長沢1997）。土製円盤としての出土であり、明確な時期の判定は難しいが、底部の成形方法、出土地点の遺物の状況から後期の所産である可能性が極めて高い。

Ⅳ　おわりに

紙面上の制約もさることながら、個人的限界もあり、意を尽くせぬまま一端稿を閉じることとなる。観察については、端緒についたばかりであり、まずは観察資料の増加を図ることが第一義であり、更なる検討・考慮を重ね、次稿を一稿と思うところである。諸先輩方の忌憚のない御批判等賜れればと願う次第である。

最後になりましたが、渡辺　誠先生、長沢宏昌氏に心より尊敬の念を奉じます。上野修一氏には、多くのご助言とともに、観察の基本・方法を学ばせていただきました。心より御礼申し上げます。また、山梨県埋蔵文化財センター、藤井寺市教育委員会、天野末喜氏、山田幸弘氏の御厚意、江原　英氏、猪瀬美奈子氏の御理解・御協力に感謝申し上げます。更に末文ではありますが、自治医科大学附属病院産科病棟の皆様、我が夫君、宿りきた我が子へ深謝の念を表します。殊に生後１日目の娘には、妊娠から出産・授乳まで、縄文時代の研究を志す者にとって、貴重な体験と発見の日々を与えられたことを記させていただきます。

2001.1.22　産科病棟にて

註

(1)　文中、先学に対し、失礼を承知で敬称を略させて頂いた。深くお詫びいたします。

(2)　新潟県室谷洞窟にカゴ底状圧痕を、長崎県泉福寺に繊維痕を確認されている（荒木1995）。

(3)　鹿児島県西之表本城遺跡例（荒木1968）。

(4)　青森県白座遺跡例（名久井1998）。

(5)　大阪府藤井寺市教育委員会・天野末喜氏・山田幸弘氏のご厚意により、観察させていただいた。

(6)　前期前葉に熊本県下で確認例があるとされる。

(7)　同心円状に編まれたカゴ底状を呈する編組品圧痕。

(8)　長沢宏昌氏の御厚意により、山梨県下の例を観察させていただいた折り、筆者の疑問に対し、その様な視点も重要であるとの御教示をいただいた。

(9)　アンペラと網代とは同義語として使用される場合があるが、辞書（岩波国語辞典1991）によれば、「網代」とは「ひのき・竹を薄く細くけずり、斜めまたは縦横に編んだもの」、アンペラとは「かやつりぐさの多年草の茎で編んだむしろ。取物・砂糖・袋等による。」と記されており、素材の差異によって区別されている。先学の論考の中に、網代編みの特に柔らかく、形態の自由がきくものについてアンペラとされていたものがあり、素材の差による質感を表現されていたものと解釈される。本稿でもこれに倣うこととしたい。

⑽　栃木県小山市所在。環状盛土遺構・水場遺構等を確認。平成13年度報告予定であり、詳細は後日としたい。

⑾　生後４～５日以内の新生児の女性器に酷似するように思われる。

⑿　秋に熟し食料に適する。

⒀　赤山陣屋遺跡例。地域差が指摘されている。

⒁　これらを用いない集団・地域が存在するが、文化の推移が包括的に表象化した例として取り上げたい。

⒂　気温変化・海面水位の変化等に伴う自然環境（植生等）の変移による生活形態の変質。

⒃　共同作業場や祭祀施設等の説があるが「共同」のものとの共通した認識があるものと考える。

⒄　植松なおみは「若干の問題があり民具資料の調査を進めた上で別に検討する」とされている（植松1981）。他、多くの先学が留意されてきたが、問題提起のままとなっているのが現状といえよう。小林行雄は民具に見られる2-2-1の編み方が「ニツハネアズロ」と呼称されていると記されている（小林1965）。

⒅　従前より渡辺　誠により繰り返し提唱されている。

⒆　ポリネシア地方等で見られる、植物を叩くことによって作られる不織布状の布。衣類にも用いられる。晩期の遺跡からの出土例（青森県八幡崎泥炭層遺跡）のあるカジの実も素材のひとつとなる（江坂1973他）。

⒇　註10に同じ。

(21)　註10に同じ。

(22)　註10に同じ。

(23)　観察は型おこしによる。

(24)　観察は型おこしによる。

引用参考文献

秋田かな子　1990「土器底部の輪積み技法」『東海大学校地内遺跡調査団報告１』

荒木ヨシ　1968「縄文式時代の網代編み」『物質文化』12

荒木ヨシ　1970「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」『物質文化』15

荒木ヨシ　1995「縄文時代における分業の一考案」『物質文化』58

安孫子昭二　1971『平尾№9遺跡』平尾遺跡調査会報告

阿部芳郎　1998「縄文土器の器種構造と地域性」『駿台史学』102

出越茂和　1981『金沢市中屋遺跡』

今福理恵　1999「縄文文化を体現する第二の道具」『縄文学の世界』

上野修一　1986岩上照朗他　『古宿遺跡』上河内村教育委員会

植松なおみ　1980「古代遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『物質文化』35

植松なおみ　1981「東北型網代圧痕について」『古代文化』33-2

江坂輝彌　1955『吹浦遺跡』

江坂輝彌　1973「縄文土器文化に見られる東南アジア的様相」『季刊ドルメン』創刊号

江原　英　1997『寺野東遺跡Ｖ』栃木県埋蔵文化財調査報告第200集

大関利之　2000「底面にホト表現を有する縄文土器」『栃木県考古学会誌』21
大塚達朗ほか　1984『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』
小野正文ほか　1986『釈迦堂Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集
小野正文ほか　1987『釈迦堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集
川端敦子　1983『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育員会
後藤信祐ほか　1995『槻沢遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第164集
後藤信祐ほか　1996『槻沢遺跡Ⅲ』栃木県埋蔵文化財調査報告第171集
小林広和ほか　1991『上の平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第59集
小林行雄　1965『続　古代の技術』
篠原浩恵　1998『雨ヶ谷宮遺跡・雨ヶ谷西坪遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第212集
庄野靖寿ほか　1974『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告第３集
杉山寿栄男　1928『原始工芸概説』
芹澤清八ほか　1994『古宿遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第142集
芹澤清八ほか　1987『御城田遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第68集
谷口康浩　1998「環状集落形成論」『古代文化』471
塚原孝一ほか　1994『三輪仲町遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第143集
塚本師也　1997『浄法寺遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第196集
坪井玉五郎　1899「日本石器時代の網代形編物」『東京人類学雑誌』14―161
長沢宏昌　1986「縄文時代前期末～中期初頭の土器底部にみられる編物圧痕について」『研究紀要』3
山梨県考古学博物館・山梨県埋蔵文化財センター
長沢宏昌　1987a「山梨県内出土縄文土器の底部にいて」『研究紀要』4
長沢宏昌　1987b『釈迦堂Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集
長沢宏昌　1989「縄文時代におけるエゴマの利用について」『山梨県考古論表』Ⅱ
長沢宏昌　1997「都留市中谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について」『研究紀要』13
中西　充ほか　1982『神谷原Ⅱ』
和久井文明　1998『縄文式生活構造』
塙喜世子　1982『神谷原Ⅱ』
原田昌幸　1999「縄文文化の中で育まれ終焉とともに消滅した第二の道具」『縄文学の世界』
八木奨三郎　1905『普遍人類学』
山田昌久　1996「時間知変化・多工程技術・空間知変」『季刊考古学』55
山田昌久　1999「集団の突出を生まなかった生業形態」『縄文学の世界』
山本直人　1989「石川県におけるワラ・タケ以外のカゴ類」『北陸の考古学』Ⅱ
渡辺　誠　1976「スダレ状圧痕の研究」『物質文化』26
渡辺　誠　1985「唐津市菜畑遺跡出土の組織痕土器について」『古代』80
渡辺　誠　1983「網布およびカゴ底圧痕について」『野々市町御経塚遺跡』
山田昌久　1996「時間知変化・多工程技術・空間知変」『季刊考古学』55